



二段橋

川端康成氏が「掌編小説」なるものを提唱していたので、私も「夢日記」から一つ選んで小説風に推敲してみました。長ったらしい文章はわざとです。好きなのです。内容は特に無いです。公開後も盆栽のように時々手を入れながら、タノシム所存であります。

その薄暗い路地裏から見上げた空は常に陰鬱黒い雲が立ちこめていて、甲介はほうとため息をついたのであるが、実はそれは雲ではなくその町内に隣接した工場群の煙突がはき出す煤煙なのであり、しかし甲介の見たところ、それは工場群といってもそのほとんどはいわゆる中小企業で小さな町工場の寄せ集めに過ぎず、それは例えば鉄工所、ネジの製作所、ボルトの製作所、メッキ屋、ボーリング屋、塗装屋等々、そうした古びた親子二代に渡って操業していますが資金繰りに苦勞していただいまつぶれかけておりますというような、トタン屋根のむしろこれらは「小屋」と表現した方が適当だろうという建物が互いに寄りかかり合うようにひしめいているのである。

その狭い路地裏を甲介はなにかつまらない気分で歩いていたのだが、なんだか道は入り組んでいて舗装も無くこれは湿った土の臭いじゃないか。両側はどこもかしこも一様に黒く塗られた板塀がこれもまた半ば朽ち果てながら長く続いており、塀の途切れる四つ角や急な曲がり角にはところどころ電柱が立っていた。そうしてそれら電柱には必ず傘のついた白熱電球がたった一つずつ付いていて、それが辺りにぼんやりした黄色い光を投げかけているものだから、ふと甲介は寂しくなってきた。

すなわち町は一言で言えば憂鬱な黒、正確には灰色ではあるのだろうがそれは限りなく漆黑になろうなろうとしている黒なのでありそれから甲介はいくつかの角を曲がりながらその湿った暗い横町をしばらく歩き、すると道は川沿いの堤防に突き当たってしまった。しかしそこには石段があったので甲介はどうしようかいなとしばし考えてから結局その石段を登り堤防の上に立ったのである。

するとそこから眺める川、いや砂利やゴミの溜まった川底を見せながらチロチロとか細く流れるその様はむしろ水路というべきだろう。それは黒く淀みゆっくりと流れ、甲介はつらつらとその水路を眺めていたのだが、重油を流したようなその水面の色は上流の工場から延々と垂れ流される廃油のせいなんだろうと考えた。

そうしてはるか川上を見ると、そこには橋がかかっている、それは二段橋というのである、と甲介は前に人からそう聞いていた。橋は間伐材なのだろうか細い細い木材だけを幾重にも組み合わせて作られており、甲介にはそれは例えば箱根細工のような何か細やかな民芸品のように見えたのだ。

たぶん、と甲介は考えた。この世には寄せ木細工の橋造りの匠という者があって、その者たちは命をかけてその道一筋、一つ一つの橋に執念をもって工芸品のようなこのような橋を造り続けているのに違いない。

そうしてよくよく見れば成る程橋は二段になっていて、一段目は町の道路と同じ高さの二車線の自動車道。トラックや軽自動車、オートバイなんかがのろのろと走っているのだが、その上にはちょうど屋根のように二段目の橋がかかっている、そちらは歩道に使われている様子、ちらほ

らとまばらに人々が歩いているのだった。なるほどこれが二段橋の名前の由来であるらしかった。

甲介は堤防の上を上流に歩きながら橋の方に近づいていったのだが、しかし何故か橋まで行く気はしなかったものだから途中で堤防を降りるとそこは雑草の生えた小さな空き地であった。元々は木材問屋のものであった古い倉庫が建っており、その一階は扉もなくポツカリと大きく黒い口を開け何の資材も置いているわけではなくただ埃と湿気の臭いがして、屋根は剥がれかけたタン葺き、赤く錆が浮いていた。

「いらせられまし。」

と、やたらに古くさく甲介に声をかけたのは気弱そうなで肩の痩せた男で年の頃なら三十代の後半だろうか、和服姿の木材問屋の若旦那であった。

「荷物は先に上げてますんで。」

何か諦めきったように力なげにそう言って若旦那は倉庫の外壁に設けられたこれもまた木製の狭い階段を上っていくので甲介も後に続いたのだが、急ですから、と若旦那はそう言って、お気をつけてくださいな。大丈夫なんだろうな、木製の階段は甲介たちの重みでぎしぎしと音を立てるのである。

屋根裏部屋に通されるとそこは甲介の荷物である本の山で埋めつくされていたのだが、よくもまあ集めたものだ。畳の上に平積みにして直に積み上げてあるそれらの蔵書の間隙間を見つけて甲介は畳に寝ころんだ。周りは本しか見えないがこれもまた一つだけ付けられた傘のついた裸電球が黄色い光を放ってそれら本の山がそこかしこに影を作っているのである。

甲介がついうとうとしてしていると、本の山の向こうからかすかに声が聞こえたような気がして目が覚めた。耳を澄ますと声を忍んで誰かがかすかに泣いているようなのだ。

起きあがって声のする方を窺うと、和服の女の後ろ姿が見えたのだが、彼女は向こうを向いて座っており袖で顔を隠しているようなので、年の頃なら二十の後半、あれはなんて言うんだろ、髪は日本髪に結い上げて、丸髷とか言うんじゃないだろうか。甲介は何故だかそれが幽霊だなあ、と分かってはいたのだけれども不思議と少しも怖くはなく、それから甲介は煙草に火を付けた。

ふうっと煙を吐き出すと、その煙は薄紫にたなびいて部屋の中を上っていきながら、そして幽霊はさめざめと泣いている。悲しいのだな、今度は甲介はそう考えた。

甲介はその幽霊を眺めながら煙草を吹かし、煙草を吹かしては幽霊を眺め、そのうち時刻は夕刻に近づいた。甲介はシクシク泣いている幽霊を残して外に出た。

沈みかけた太陽がオレンジ色に染まっていりのだが特に当てもなくぶらぶらとそこらの横丁を散歩をしていたところが甲介は一軒の居酒屋に行き着いた。赤提灯の明かりだけが頼りで少し開けた四つ角にあったその店は、およそ繁盛しているようには見えなかった。

暖簾をくぐると客は甲介を除いて一人だけ。離れた店の隅に座ったが、カウンターに突っ伏して何かぶつぶつ呟いているその客の様子を見ると、ああ、それはさきほどの材木問屋の若旦那。店の主人が仕方なさそうにその繰り言を聞かされているのだった。...あれはオレの女房だったんだ、女房だったんだ。そんな言葉が聞こえてきた。

するとあの幽霊は若旦那の女房だったんだ。甲介はそう気がついて、すると何故か意味もなく、また誰にともなく申し訳なく思えてきて若旦那に同情し、誠に切ない気分となったのであった

。